

会員投稿 『人の手が基本技能』 太田市 高柳 直孝

(今回は、上毛新聞の「巧み人」の欄で平成15年3月9日に掲載されました、高柳 直孝さんの記事を紹介します)

三菱電機群馬製作所＝尾島町岩松＝に在籍中の1999年、電気機械器具開発試作工として、「現代の名工」に選ばれた。会社は定年退職したが、グラウンドゴルフ仲間に手製の携帯用ボールキャリアをプレゼントしたり、孫の万奈ちゃん(2つ)におもちゃを作ってあげたりと、今でもものづくりに情熱を傾けている。

在職中は一貫して、新開発製品の性能試験のための試作品を組み立てる仕事に携わった。製作用の機械がそろっていなかったこともあり、当初は部品の一つひとつが手作り。ねじなども、長さが20cmもあるような特殊なものは、すべて自作した。手掛けた製品は、大ヒット商品の石油ファンヒーターをはじめ、トースターや魚焼き器など1千機種にのぼる。

高校卒業後、職業訓練校で板金加工を学んで入社。駆け出しのころは、指導を受けても部品の形の作り方がよく分からなかった上、図面の読み方も知らなかった。仕事は指導員の作業を手伝いながら、目で見て覚えた。経験を積み、不具合などを的確に設計者に伝えられるようになると、設計者から何度も事前に相談を持ち掛けられるようになった。的確なアドバイスは試作工の大事な仕事で、退職した現在でも、かつての同僚から相談を受けることがある。

現代の若者は体を汚さない仕事を選び、苦勞を避けたがる傾向にあることから「ものをつくる喜びを味わってない人が多い」と危機感を募らせている。「工場が自動化しても、溶接に必要な温度や時間などを判断するのは人で、人の手が持つ技術が基本。今後も大切にすべき」と警鐘を鳴らす。

小学生のころ、プロペラ飛行機を授業で作ったことを思い出す。どうしたらほかの人達よりも長く飛行機を飛ばすことができるか。必死に考えたすえ、プロペラを一回り大きくして、機体に張る紙を薄くした。また動力のゴムを1.5倍の長さにするこゝで、学年で一番長いフライト時間を実現した。「技能とは、自分で工夫して改良できる能力。自分の原点はこの飛行機にある」と少年時代を振り返る。不景気のためか、培った技術を生かせる再就職口はなかなか見つからないが、子どもたちを対象にしたものづくり教室を開くのが夢。

「おもちゃ作りを教えながら、ものづくりの精神を伝えていきたい」と考えている。



プロフィール：1940年、尾島町生まれ。58年、伊勢崎高校普通科を卒業し、60年に三菱電機群馬製作所に入社。試作畑を歩みつづけ、87年に太田市優秀技能士賞を受賞。99年に県優秀技能士、現代の名工。2001年に定年退職した。